

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平 11-130073

(43) 公開日 平成 11 年 (1999) 5 月 18 日

(51) Int. Cl. ⁶	識別記号	序内整理番号	F 1	技術表示箇所
B65D 21/08			B65D 21/08	
1/02			1/02	B
77/30			77/30	E A

審査請求 未請求 請求項の数 3 FD (全 3 頁)

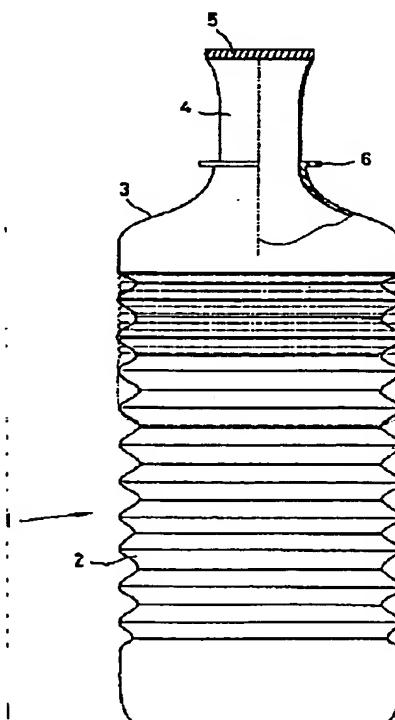
(21) 出願番号	特願平 9-314533	(71) 出願人	000006909 株式会社吉野工業所 東京都江東区大島 3 丁目 2 番 6 号
(22) 出願日	平成 9 年 (1997) 10 月 29 日	(72) 発明者	阿部 孝之 東京都江東区大島 3 の 2 の 6 株式会社吉 野工業所内
		(72) 発明者	後藤 孝之 東京都江東区大島 3 の 2 の 6 株式会社吉 野工業所内
		(74) 代理人	弁理士 今岡 良夫

(54) 【発明の名称】詰替え用液体収納容器

(57) 【要約】

【課題】 使用済み後において、容器の体積を容易に縮小できる、詰替え用液体収納容器を提案する。

【解決手段】 脊部 2 を伸縮自在な蛇腹状とし、かつ脣部上端から肩部 3 を介して起立する口頸部 4 上端を、平板状に潰し、かつ溶着したシール部 5 として密封した。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 伸縮可能に設けた蛇腹状胴部2の上端から、肩部3を介して口頸部4を起立すると共に、該口頸部の上端部を平板状に潰しかつ溶着したシール部5として密封し、全体を合成樹脂材で成形したことを特徴とする、詰替え用液体収納容器。

【請求項2】 シール部5の両端が、口頸部外面に沿って垂下する形状に、口頸部の両側部を平板状に潰しかつ溶着した板状部7、7を形成して口頸部を小径化し、かつそれ等両板状部7、7の対向位置に切欠き8、8を設けると共に、これ等両切欠き部分間の口頸部部分に肉薄の破断線9を周設したことを特徴とする請求項1記載の詰替え用液体収納容器。

【請求項3】 口頸部4の肉厚を、胴部2および肩部の肉厚に比して肉薄としたことを特徴とする、請求項1又は2記載の詰替え用液体収納容器。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は、詰替え用液体を収納させた、合成樹脂製の容器に関する。

【0002】

【従来の技術】 詰替え用液体充填容器として、合成樹脂製で、胴部上端から肩部を介して起立する容器体の口頸部に、キャップを螺合した容器が一般に用いられている。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】 詰替え用液体充填容器は、例えば液体噴出器付き容器体の液体が無くなったとき、詰替えするための補充用液体を収納するものであるから、構造簡易でかつ廉価であることが要求される。又近時廃棄物の減量化が必要とされていることから、使い終わった後、踏み潰し等して容器の体積を少く出来ることが望ましい。本発明は容器体胴部を伸縮自在な蛇腹状とすることで、その蛇腹状部が伸長した状態で液体を充填し、使い終わった後は胴部を短縮させて廃棄し、又口頸部上端はキャップ等を用いることなく、板状にその口頸部上端を潰し溶着して板状のシール部とし、その開口はその口頸部上端部分切除により行えるよう設けたものである。

【0004】

【課題を解決するための手段】 第1の手段として伸縮可能に設けた蛇腹状胴部2の上端から、肩部3を介して口頸部4を起立すると共に、該口頸部の上端部を平板状に潰しかつ溶着したシール部5として密封し、全体を合成樹脂材で成形した。

【0005】 第2の手段として、上記第1の手段を有すると共に、シール部5の両端が、口頸部外面に沿って垂下する形状に、口頸部の両側部を平板状に潰しかつ溶着した板状部7、7を形成して口頸部を小径化し、かつそれ等両板状部7、7の対向位置に切欠き8、8を設ける

と共に、これ等両切欠き部分間の口頸部部分に肉薄の破断線9を周設した。

【0006】 第3の手段として、上記第1又は第2の手段を有すると共に、口頸部4の肉厚を、胴部2および肩部の肉厚に比して肉薄とした。

【0007】

【発明の実施の形態】 以下図1から図3が示す第1実施形態について説明すると、本発明の容器1は、底壁外周から伸縮可能な蛇腹状胴部2を起立し、該胴部上端から肩部3を介して口頸部4を起立し、その口頸部上端を平板状に潰し、かつ溶着してシール部5としている。

【0008】 胴部は図示例よりも更に長く伸長して収納液を充填してもよい。口頸部の下部には外向きフランジ6を周設している。該外向きフランジは容器をレールに沿い走行させて胴部内へ液体を自動充填させる工程時ににおいて、上記レールへの係合面として利用するが出来、又容器持運び用把手として使用が出来る。図示例において口頸部肉厚を、肩部等に比して薄肉とし、後述のように上記シール部切除を容易としている

が、肩部および胴部等と同一肉厚に形成しても差支えない。

【0009】 図1が示す、容器内への液体充填状態で輸送等を行い、液体噴出容器等への液体詰替えの際は、図3が示すようにシール部5下方の口頸部部分を鉄等の器具で切除し、口頸部を開口させて行うが出来る。容器は合成樹脂材で成形し、シール部形成だけを後加工する。

【0010】 図4と図5とは第2実施形態を示す。該実施形態においては、図5が示すように、シール部5の両端が口頸部外面に沿って垂下する形状に、口頸部の両側部を平板状に潰しかつ溶着した板状部7、7を形成して、口頸部4を小径化し、又それ等両板状部7、7の対向位置に切欠き8、8を設けると共に、それ等切欠き部分間の口頸部部分に肉薄の破断線9を周設した。該破断線は肉薄の凹状点線でもよく、又肉薄凹溝により形成してもよい。それ等切欠き8、8と破断線9とで、それ等の上方口頸部部分を折り取る等して除去可能とする。その他部分は第1実施形態と同様に形成する。

【0011】 尚図3および図5が示す、口頸部4上端のシール部5の形成は、容器内への液体充填の後に行う。実際にはそのシール部の加工形成だけを残した、図2又は図4が示す口頸部開口の状態で、容器製造メーカーから収納液体メーカーに容器を輸送し、収納液体メーカーは容器内への液体充填の後、上記シール部5の形成を行い、容器を密閉するものである。

【0012】

【発明の効果】 本発明は既述構成とするもので、容器の胴部を伸縮自在な蛇腹状に形成するから、胴部伸長状態で液体を充填でき、又収納液体放出後は胴部を圧縮させて廃棄することが出来、従って廃棄後の容器体積を使用

時よりも縮小できて廃棄物減量に役立つこととなる。

【0013】又胴部は伸縮自在で、かつ液体充填後に口頭部上端を密閉するから、容器内への収納液体量を一定の範囲で可変とすることが出来る。つまり容器の容量を、例えば1.5リットルから2リットルまでとし、その範囲であれば、蛇腹状胴部の伸縮の度合により調整して、1.5リットル入りであれば容器の高さを低く縮め、2リットル入りであればその高さを高く伸長させることで、同一大きさの容器を1.5リットル入りから2リットル入りまでの収納量可変容器とすることが出来、従って従来のように液体収納量が変るたびに、収納量の異なる大きさの容器を作製しなければならない面倒を除くことが出来る。

【0014】更に口頭部4上端を平板状に潰したシール部5として密封したから、キャップ螺合の場合のように口頭部を厚肉とする必要がなく、口頭部肉厚を薄くすることが出来、従ってその口頭部切断による口頭部の開口も容易である。尚該口頭部肉厚を胴部2および肩部3等の肉厚よりも更に薄肉とすることで、上記シール部5の形成および該シール部切断除去による口頭部開口を更に容易とすることが出来る。

【0015】シール部5の両端が、口頭部外面に沿って

垂下する形状に、口頭部の両側部を平板状に潰しつつ密着した板状部7、7として口頭部を小径化し、かつそれ等両板状部7、7の対向位置に切欠き8、8を設けると共に、これ等両切欠き部分間の口頭部部分に肉薄の破断線9を設けることで、該破断線上方の口頭部部分を捻り、又は折り取る等して除去できることとなり、口頭部開口を容易に行うことが出来る。

【図面の簡単な説明】

【図1】 本発明容器の側面図である。

【図2】 図1容器の口頭部密封前の状態を示す、その口頭部の斜視図である。

【図3】 図1の容器の口頭部を示す斜視図である。

【図4】 第2実施形態容器の口頭部を密封前の状態で示す斜視図である。

【図5】 図4が示す口頭部を密封した状態を示す斜視図である。

【符号の説明】

2 … 胴部

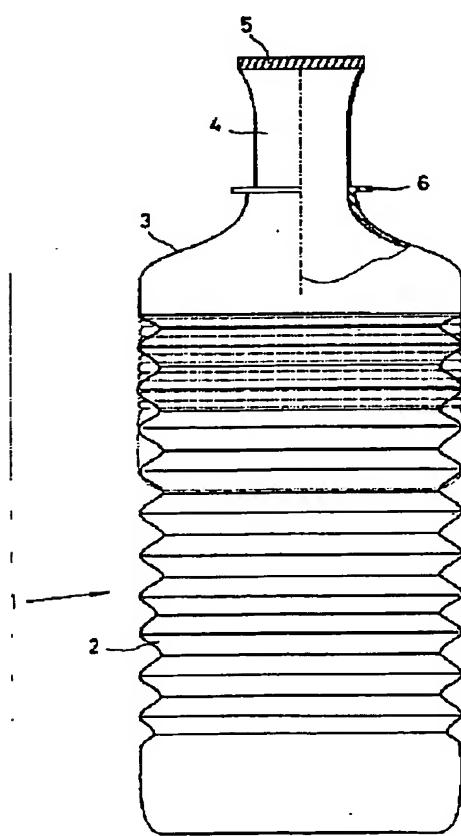
5 … シール部

7 … 板状部

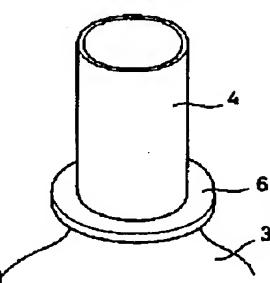
8 … 切欠き

20 9 … 破断線

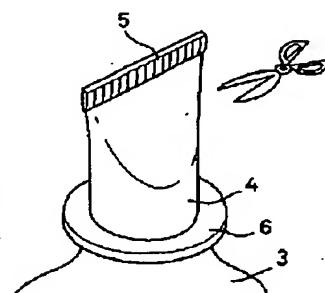
【図1】



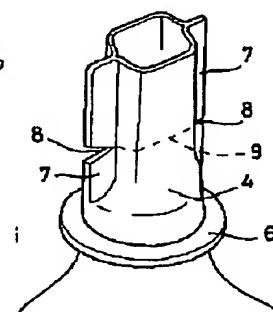
【図2】



【図3】



【図4】



【図5】

